永らえて

島本　燿子

一、信仰の背景

私の親は宗教とは無縁だったと思いこんでいたが違っていたかもしれない。御殿場出身の父の家系は無く分からないが、父の五人の弟のうち二人はキリスト教に関心を寄せていたという。男ばかり七人続いた八番目の叔母一人がカトリックである。九十歳過ぎて一人取り残されてから、叔母ははっきりとそう言った。

キリスト教の話をしても、先祖の墓を守って供養している。それが自分の宗教だと、頑として耳を貸してくれない人がいる。そういう空気の中にいると、キリスト教に近づくのは難しかったのかもしれない。父にも思いはあったようだが入信には至らなかった。

読めそうな本を探して父の書棚に、「聖書」とある小さな本を見つけたことがある。だが、ずらりと並ぶカタカナの人名にたちまち興味を失い、そのまま閉じてしまった。

「叩けよ、さらば開かれん」、「人もし汝の右の頬を打たば、左をも向けよ」などという言葉が家の中で流行った時があったが、文語体はリズミカルで覚えやすい。意味も分からずにふざけて、ふすまなどをトントンと叩いていた。これが聖書のみ言葉であると気づいたのはずっと後で、多分、父がもたらしたものに違いなかった。

私の家は代々農家である母の実家と隣り合っていた。母のおじいさんは庭で若い男衆たちに、念仏の時に叩く太鼓の稽古をつけていたそうだが、私の知らないおじいさんである。

私の祖父は、お盆にはナスやキュウリの馬を作り、家の辻で迎え火を焚くのが役目だった。私も面白がって、そんな祖父の後について回った。

「おばあちゃんが死んだら、仏壇にお線香をあげてよ」と、祖母は言った。

そんなことは当たり前だと笑って受け流していた私だったが、クリスチャンになったらできなくなるなどその時は夢にも思わなかった。

遠くなった実家へ物日等に行かずとも、懐かしい人たちはいつも私の中に生き続けている。優しかった祖母を想い、姉妹で思い出を語り合うことは度々である。

キリストの福音を聞く機会もなく亡くなった人の魂はどうなるのか。受洗したころは心配だった。答えは人によってまちまちだった。だから私は勝手に結論を出した。

すべての人は神によって生まれた。その神が人を愛さないわけがない。その人がたとえ真の神を知らずとも、必死に呼び求めれば必ず神は聞いてくださる。だから、なかなか信仰告白に至らない人に私は言う。

「いよいよとなったら、『神様』と呼んでください。必ずあなたの声は届きます」と。

二、戒厳令の夜

一九三六年（昭和一一年）二月二六日、父は一人夜道を急いでいた。三日前の残り雪の上に昼過ぎからさらに降り募ってきた雪は、容赦なく長靴の中にまで入ってくる。

この日は、陸軍青年将校らが陸軍部隊を率いてクーデターを起こしたため、東京全都には戒厳令が布かれ、一切の交通機関は遮断されていた。一般家庭に電話が普及していない時代は、ラジオのニュースだけが頼りだったが、詳しいことは分からなかった。

結婚以来母の実家の隣に住み続けていた両親だったが、父は世間知らずの母に、転地を図って三年間だけ清瀬に移り住み、私はその年の一一月に生まれた。

貸家にしていた世田谷の家の管理に問題が起きて、午後から話し合いのために父は出かけて行ったのである。東京の西のはずれである清瀬から、直線距離で四里はあったろうか。引き止められても泊まってくる父ではないと分かっていた母は、風呂の焚口に薪をつぎ足しながら湯を沸かして父の帰りを待っていた。三人の子供達は静かに寝入っている。母は外の気配に耳をそばだてる。枝につもった雪が落ちる音に空気が揺れる。雪明りだけが人通りの絶えた道を照らしていた。

雪まみれで玄関に立った父は「手を貸してくれ」と言った。長靴の中に雪が詰まって脱げないのである。母は風呂の湯を運び長靴の中に注ぎ入れてから、やっと長靴を脱がせた。

あれは後にも先にもない経験だったというのが、母の度々の思い出話である。母は四人目の私を宿して妊娠初期だった。住み慣れない土地で戒厳令が発令され、騒然とした時代の空気は不安だったに違いない。後に、思春期の私に母は言った。

「お前を生みたくなくて辛子をたくさん食べてみたけれど効かなかった」

二女一男の次も男の子だったら男女二人ずつになったのにとも言ったが、全ては神のご計画だから人間の勝手な思いは聞かれない。何気ない母の否定的な一言は、成長につれて私の中で大きく膨らみ、私は消極的な生き方しかできなくなっていた。

私の名前には「光」がついている。父が、光り輝く人生を願って付けたという。上の姉の名は、両親の名の頭から一字ずつとっている。次の姉、兄、妹、弟、すべて父の命名である。字画を考え、その時々の想いを込めて付けた名前である。誕生した子の光り輝く人生を願わない親は無いであろうに、何故私だけが光の文字を貰ったのだろうか。

小学校の習字では画の多い難儀な漢字だった。父の望みを忘れて生きることに悩んだときもある。しかし、よい字だとほめられたことも度々ある。父にそんな話をすると、気難しい父の顔はいつになく綻んだ。私の名は父からの贈り物である。瞳の輝きだけは失わずに生きて行こうと思い直すと、自分の名前が好きになった。

あの戒厳令の夜の雪明りは、父への光の贈りものだったかもしれない。

三、幼少年時代

私が育った所は、昔はそこにキリスト教会があったという東京世田谷の蘆花公園に近い。蘆花公園では子供会などがあり、大人の散歩にも連れ立って行く親しい場所だった。母の実家と隣の小さな貸家と我が家は庭続きで、気ままに行ける私の世界のすべて。私は大人たちの微笑みに包まれて、屈託のない幼年時代の日々を過ごしていた。

昭和二〇年(一九四〇)三月一〇日、東京大空襲の夜。一家は、夕映えのように赤く染まった東の空を目に立ち尽くしていた。足元を黒い紙に似た燃え殻が舞い散った。いよいよ兄と私に長野県への学童疎開が決められた。一次二次は見送ったが最終組である。疎開先では虱と疥癬に悩まされ、栄養失調でむくんだ頬に目は細くなり、優しかった姉たちと離れた集団生活に鍛えられて可愛くない子に変わった。至福の幼年時代は終わりである。

帰宅後も食料不足は続き、清瀬時代に親しんだ父の友人のSさんが、四人のきょうだいを旧正月に呼んでくれた。満員電車の清瀬行きは遠かったが、疎開生活で鍛えられた私は、殺人的満員電車にも負けなかった。大きな椀に大きな餅の鶏雑煮が嬉しかった。食糧難時代のありがたくも嬉しい思い出である。Sさんは家族でただ一人のクリスチャンだった。古びた木の十字架が掛かっている小部屋で、「聖書っていいものだよ」と一言。無骨な太い指で、古びて傷んだページを押さえながら、Sさんは言った。

敗戦の翌春、十歳違いで妹が生まれ、二年後に弟が生まれた。二人は可愛かったが、私の家庭内の位置は変化した。半年間の疎開で母との間にも距離ができた。次第に、寂しさと苛立ちから、「内気」と言われていた私に消極的な自殺願望までが入り込んでいた。

外で遊ぶことは少なく、テレビのない時代だから手近の本を読んだ。父の蔵書の一部は食料に変わっていたが、「現代日本文学全集」専用の書棚は残されて、遠縁の青年が度々借りに来た。ある時その人から、漱石の「猫」を薦められた。漢字はすべてフリガナ付きだから小学生でも読めると言うのだ。漱石の一冊を手初めに、谷崎や室生犀星など色々読んだ。戦後出た文芸誌などもこっそり覗き、意味は朧気ながら大人の語彙を知った。すっかり本の虜になった私は、読書が導いてくれる空想の別世界を楽しんでいた。この時の読書が、子育てを終えた後の読書会から盲人のための朗読奉仕へ繋がっていったのである。

就職した長姉が買ってくれる「少女クラブ」の表紙は毎号、中堅洋画家が描く品格のある雑誌だった。「少女クラブ」の歴史小説で、切支丹迫害の事実を知ったが、切支丹の信仰とはどんなものか、その時の私には分からなかった。蕗谷虹児が描く挿絵の細密な色彩の美しさに惹かれて読んでいたのだが、一度得た信仰は絶対に捨てない人たちの姿が鮮烈だった。信仰を持つとはこういうことだと教えられて、私の心に刻み付けられたのである。

四、青春時代

中学高校は頭に「新制」が付く変革の時代だった。私が公立高校を昭和三〇年に卒業して就職した百貨店は、厳しい職場だったが、日本経済は敗戦の痛手から少しずつ上昇していたから、職場の人たちと海水浴などに行き、ささやかな青春らしさを楽しんだ。

四年後に結婚して今まで通りに働いたが、結婚して勤め続けると尚一層働かねば怠けていると言われる。年末多忙時に高熱で一日休んだ翌日、隣の売り場主任が勝手に休むなと怒鳴りつけた。腹の立つ人だが、間もなく肺結核で休職になったのはお気の毒だった。子どもが出来るまで働くつもりが、二年経っても気配のない私を見兼ねた夫が退職を促した。翌月、退職を待っていたように長男を宿して、金銭には代えられない大切さを知った。二年後に次男も生まれた。しかし、充実した日々に、突然の出来事が次々に襲う。

同期入社のトップで都内の営業所長になった夫は常に、「成績」を挙げねばならない。若気の至りの失敗でも、夫の勤める証券業界は損をしない仕組みになっていた。夫に同行して親しくなった顧客とのトラブルで、本社と営業所との板挟みになり、ささやかなマイホーム用の土地を、「お客様」に提供した。二年三か月間の私の努力も加わっている土地であることは上司も知っていたので、これは将来のために大きな投資になったようだ。

私はこの「大英断」以後、夫のお客様から遠ざかった。ある日暮れ時、夫の部下から電

話でその「お客様」宅への道順を聞かれた。お気をつけてと一言付け加えて詳しく教えると、その一言が励みになって、その日の内に訪問できたと聞いたときは私も嬉しかった。

夫が営業廻りの途中、突然部下を連れてきてこれからすぐ食事を出せということが度々あり、冷蔵庫をカラにして何とか応じた。夏に濡れ縁でスイカを振る舞ったら、後日庭にスイカの種が芽を出した。忙しさの中にも、いろいろとあるのが面白かった。

ある夜、酒気を帯びて帰宅した夫は、「あんな会社は辞める」と、息巻いて寝てしまった。理由もなくいきなり左遷されたことだけは聞き出した。私はそれなら社長さんに聞いてみる。と、制止を期待して夫の枕もとでダイヤルを回し始めたが、夫の手は伸びず電話は社長さんに繋がってしまった。こうなれば言うべきことは言わねばならない。社長さんは優しく組織の説明をして下さったが、まだ報告は受けていなかったようだ。翌日、本社から手土産付きで「見舞い」があった。夫は前夜のことは忘れたように、さっさと出勤して行った。困った私は社長宅へ花束をもって失礼のお詫びに行った。左遷の理由は、清算すれば一万円のトラブルに、出世の見込みを諦めた若い社員が逃げたのだ。調べる前に夫を左遷させた上役。「辞める」と息巻いた夫。深夜に社長宅へ電話した私。何とも気の早い人たちだ。当時は貴重品の折畳傘を貸したままなのが唯一、我が家の損害だった。

五、奇禍

夫は、本社が大阪から東京に移って採用された第一期生である。夫を送り出した郷里の宇和島では期待が大きかった。私の父は、大人しい兄にはない魅力を感じて娘の夫として認めたのだが、東京には大学出の男なぞ箒で掃いて捨てるほどいる。と、笑う。時には感覚の差による冷淡さが実家への私の足を遠ざける。前述の左遷騒ぎの前だったが、久しぶりに母子三人で実家へ向かった。信号機のない横断歩道の前に来た時、手前の車線に止まった車列の間から、いつもは用心深い五歳の長男が浮き足立って、真っ先に走り出た。

反対車線から疾走して来た小型トラックが、児を十メートルほど前方に撥ね飛ばして止まった。タイヤの下から現れた右足の甲は、三本の真っ白い骨が鳥の足のように露出している。履かせていたよそ行きの黒い革靴は、裂きスルメのように刻まれていた。児は脳神経外科病院に運ばれ、事故から十二、三時間たったころ、やっと意識が戻った。足の怪我以外に目立った外傷はないが、診断は交通事故の死亡原因中のトップの「頭蓋底骨折・脳挫傷」である。児をはねた車は、頭部の痕跡がそのまま丸く凹んでいたという。もう少し位置がずれていたら、固いガラスのライト部分に当たったはずで、危ないところだった。

酸素テントの中で氷枕を当て、顔の両側には氷嚢を置き、体を押さえつけて絶対安静を強いる徹夜の看護が続いた。無神論者で己を恃む気持ちが強かった私は、「困ったときの神

頼み」を軽蔑していた。そんな私に頼れる神はない。事故の一瞬は、すべてを奪われた絶望感に襲われたが、唯々、〈この子の命を助けてください。そして、元通りの体に直してください〉と、念ずるほかなかった。ほどなく、頭は手術の必要もなく回復した。足も骨折はなく、後に形成外科で植皮手術を受けて治した。事故は不運だったが、幸運が重なった。

この運・不運の分かれ目は何なのだろう。何か『大きなもの』の力が働いているのではないかと、初めて私は気が付いた。あの頃抱えていた私の不満が心の隙を作り、事故を招いたのかもしれない。愛する家族がいるだけで幸せなのだ。と思ったら、今までの不満が小さく見えてきた。『大きなもの』とは何か分からないが、今までと違う私がいた。自分の努力の結果かと、再び殻の中に閉じこもっても、この恩はどこかで返したかった。

幼稚園児の子どもは回復して、元気な小学生である。再び夫は仕事に明け暮れる生活に戻った。トラブルの原因が分かって、左遷と思われた夫は本社で新しい仕事を与えられた。定時通勤の平穏な職場をうらやむ気持ちもあったが、夫の生き生きと働く姿は頼もしい。

新しい支店開拓を命じられて探し当てた横浜に、建売住宅も見つけて買った。取り敢えずは土地だけのつもりだったのに家も一軒建っている。ローンの支払いが出来るか不安だったが、頭金を工面して急な引っ越しとなった。初めてのマイホームである。

六、救われて

支店開設準備からそのまま横浜支店長になった夫の仕事は順調に伸び、そのころから景気も良くなって暮らし向きは落ち着いた。よい気候に恵まれて子供たちも健康になった。引っ越した翌年三三歳の私に生まれた長女が小学校に入ると、私にもゆとりができた。読書会に参加し、盲人の為の朗読奉仕も始めた。熱心なクリスチャンになっていた姉が、私を教会に誘った。しかし、相変わらず己の力を恃む私は「私には大きなものが付いているから」と、断った。子どもの事故から一六年経っていた。

長男は大学三年、次男は一年、娘は中学一年の秋。次男が統一教会に入りたいと言う。カトリックの幼稚園を出た彼がキリスト教に惹かれていたとは知らず、高校は法然上人の御親筆なる【南無阿弥陀仏】を高々と講堂正面に掲げる仏教系。神様を知らなかった親が選んだ多感な彼に合わない高校だったが、進学した大学に不足はなかった。受験から開放され、大学生活を楽しんでいるはずだったのに、全く思いがけなかった。息子の悩みに気づかず、趣味だ、ボランティアだと、何と私はいい気なものだったかと悔いた。

東北大でも問題になっていると話していた、仙台の長男に電話で詳しく聞き、図書館の本で彼等の実態を知った。次男から渡された本にも矛盾点を見つけて反論できたが、それ以上私に何ができるか。信仰を持たない者の悲しさが身に沁みた。彼を失いたくなければ、

お前の居場所はここだけなのだと、示してやるしかなかった。食事に気を使い、毎日布団を干して、居心地の良い環境を整えた。さらに知りうる限りの人に手紙や電話で助けを求めた。最後は、彼が慕っている塾の先生にお願いした。彼等が会っている間私は必死に祈った。不遜にも「神様が本当においでなら・・・」と神様を試して迫り、信じますと約束した。息子は先生に説得されて帰ってきた。神様は私の祈りを聞き届けてくださったのだ。

私は、娘が通うミッションスクールＰＴＡキリスト教研究会(キリ研)で学び始めた。ずっと黙って見ていた夫が教会へ行こうと言い出し、間もなく二人で洗礼を受けた。漠然としていた『大きなもの』とはイエス・キリストだったのだ。しかし以前に、般若心経は一番短い経であると聞き、解説書と一緒に買ったテープが一つ、気になっていた。

「仏教とキリスト教は、世界の二大宗教といわれていますが、宗教はキリスト教だけです。仏教はほとけの教えなのです」と、薬師寺管長・高田好胤師が説いている。洗礼を受ける前にもう一度聞いて納得した。イエス・キリストの他に、神はいないのだ。

「キリ研」の指導者である校長先生に受洗の報告をすると、先生は私の手を取って、心から喜んでくださった。理屈っぽい人は手間がかかると姉は笑ったが、多くの人の祈りが陰にあったのを知った。こうして私は、神の家族に加えられたのである。

七、平安

受洗後しばらくすると、沢山の大きな人骨を前に、夢の中の私は焦りに焦っていた。それは死を願った私自身の骨であり葛藤して来た人のでもある。何とかして隠さなければならない。しかし、すべては主の御手の内にある。私も生まれる前から主の計画の内にあったと教えられて、悩みは消えた。神の真実を知らなければ心の平安はないのだ。

母は主の計画を知らぬまま、主に従って私を産み育ててくれた。それに気が付くと、母に対する葛藤も消えた。夫は親の愛を一度も疑ったことのない人である。僻地の漁村で生まれ育った夫に十分な勉学環境はなく、高校から勉学に目覚めたのだが、親は十分な援助をしてくれたと言い今も深く感謝している。私も、度々聞かされて憧れた夫の故郷へ、一家で訪れて釣りをした。以来、あの青い空と海は私の故郷でもある。

長男が事故に遭った当座は思い出すだけでも身が震えたが、完全に回復して父親の期待に応えてくれた。中高一貫の進学校から東北大学に進んだ。次男は慶大を出て県立高校の教師になった。夫が切にと望んで生まれた娘も良き伴侶を得て幸せに暮らしている。

子煩悩な夫はためらわずに子供の話をした。教育熱心だが過度な期待はしない方針で、三人共一浪もせずに進学している。等と言えばその積りはないのに、相手には自慢話と受け止められてしまう、と言って夫は苦笑いをする。

私たち夫婦は三人の子を世へ送り出し、家とそこそこの年金もある。時には失敗もあったが、ゼロからスタートして、多くのものを与えられた。すでに恵みは十分に受けている。まさに、『主は与え、主は取られる』と、聖書のとおりである。

高校以来の友であるNさんのご主人も夫と同業の証券会社勤務だった。私たちは、それほど厳しい業界とは知らずに結婚して、他の人には言えない話が、二人の間ではよく通じ合った。彼女は最初から、株価の動きを示す「罫線表」を作ってご主人に協力していた。その、聡明なNさんが認知症になった。病身の一人娘さんを亡くして気が折れたのだろうか。ご主人も病気だという。特養に入ったNさんに会いに行くと、彼女は何もかも忘れていた。まもなくご主人から私家版の句集が送られてきた。夢の中で亡き児の歌を聴き、子も妻も守れなかったと詠う句に、苦楽を共にしてきた姿が目に浮かび、心を温めてくれた。

元気だった私も、思いがけなくパーキンソン病で難病患者になった。死に至る病ではないが、動作の緩慢さはどうしようもない。新たに備わった個性と心得て、ゆっくりおっとりと暮らす私に、あのせっかちだった夫が合わせてくれている。

夫婦は人生を共に戦ってきた戦友だと夫が言う。

私もNさんも、渦中にある時はかなり波乱万丈な人生だと思っていたが、平安の内にある今になれば、大したものではなかったような気がしてきた。

愛唱聖句（（新改訳第三版）

＊創世記一章一節
　初めに　神が天と地を創造した。
＊第一テサロニケ五章一八節
　すべての事について、感謝しなさい。
＊ヨブ記一章二一節
　主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな。

愛唱賛美歌

＊聖歌三九六番　　十字架のかげに
＊聖歌五三九番　　キリストにはかえられません